

[学会報告]

ルシン学会「第3回若手研究者および専門家学会」に参加して

岡野 要

2016年5月21日、セルビア北部ヴォイヴォディナ自治州の州都ノヴィ・サドにあるノヴィ・サド大学哲学部において第3回若手研究者および専門家学会（ヴォイヴォディナ・ルシン語：Трета наукова конференција младих науковцох и фаховцох）が開催された。この学会は、2012年4月21日にノヴィ・サド大学哲学部ルシン学科の開設30周年およびルシン語による若手向け文化誌 MAK の創刊40周年を記念して開かれた第1回学生学会「ヴォイヴォディナにおけるルシン人共同体の発展における若者の役割」（Перша студентска наукова конференција “Улога младих у розвою рускей заедници у Войводини”）を継続する形で、2年に一回のペースで開催されている学会である（cf. Зборник 2013, Сабашош 2013）。参加者は、35歳以下の若手研究者、大学院生および学部学生、そしてルシン文化に関わる報道・教育・出版といった様々な分野で活躍する若者たちである。

セルビアには、これまでルシン研究またはルシン人共同体を主要なテーマにした、定期的で開催される学会は存在しなかった。ルシン研究者は、スラヴ学を対象としたセルビア・スラヴ学協会の年次大会（Skup slavista Srbije）、ノヴィ・サド大学哲学部の主催する人文学・社会学系国際学会「文化の出会い」（Susret kultura）および同学部の主催する人文学・社会学系若手国際学会「コンテクスト」（Contexts）などの学会を除けば、ルシン語で報告・議論の出来る場が大きく限られていた。こうした状況の中で、2000年代以降セルビア国内および周辺諸国において増加傾向にある学生学会や若手研究者向けの国際学会をモデルに、ルシン人共同体に関わるテーマを対象にした、ルシン語の分かる聴衆を相手にルシン語で報告の出来る若手研究者向けの学会が企画されたのは、ある程度自然な流れと捉えることが出来るだろう。

この学会を組織しているのは、ヴォイヴォディナ自治州のルシン人共同体において重要な役割を担っている教育・研究機関および文化団体であり、第1回学会はノヴィ・サド大学哲学部ルシン学科と出版社「ルスケ・スロヴォ」（Руске слово）が、第2回学会はヴォイヴォディナ・ルシン人文化研究所（Завод за културу войводянских Руснацох）、ノヴィ・サド大学哲学部ルシン学科および若手によるルシン研究チーム「研究サークル」（Вигледовацки круг）の企画・運営により開催された。学会の扱うテーマはルシン人共同体に関わる諸分野で、言語、文学、歴史、文化、社

会学に関わる報告がこれまで行われている。もともとルシン語での学術活動を促進する目的で企画された学会であるため、基本的にルシン語で報告・議論を行うことが前提となっている。しかしながら、今後セルビア国外に住む、ヴォイヴォディナ・ルシン語とは別の標準語を持つルシン語話者やルシン研究を専門とする非ルシン系の若手研究者の参加が見込まれることから、この先この学会が発展していく過程で言語に関する規定が設けられることが予想される。

学会開催後には、報告の原稿を集めた成果論集が発行されている。第1回学会後に発行された論集にはノヴィ・サド大学哲学部ルシン学科教授でヴォイヴォディナ科学芸術学士院正会員であるユリヤン・タマシュ氏の序言のほか、10本の論文と学会全体の総括が、第2回学会後に刊行された論集には週刊紙ルスケ・スロヴォの編集長ボリス・ヴァルガ氏の序言と12本の論文が収められている（Зборнік 2013; Зборнік 2015）。今回筆者の参加した第3回学会の報告を集めた論集は2017年中に刊行される予定で、既に査読・編集作業が始まっている。



[写真1] 第2回学会成果論集の表紙

*

第3回若手研究者および専門家学術学会は、ノヴィ・サド大学哲学部2階114教室において行われた。最初に第3回学会の企画・運営を担当した「研究サークル」を代表して同学部ルシン学科大学院博士課程に所属するアナ・リマル氏より挨拶があり、続いて同学部ルシン学科学科長ヤンコ・ラマッチ教授の開会の辞および同学科副学科長ミハイロ・フェイサ教授からの激励の辞があった。

今回の学会では計10本の報告が3つのセクションに分かれて行われた。報告者の数はそれほど多くないものの、言語学・言語文化に関わる報告が6本、文学、歴史学、人類学、地理学の報告がそれぞれ1本ずつあり、非常に多様なテーマを扱った学会となった。報告者の民族別内訳はルシン人8名、スロヴァキア人1名、日本人1名で、報告言語はルシン語9名、スロヴァキア語1名であった。週末ということもあり、会場を訪れた人の数はそれほど多くなかったが、ヴォイヴォディナ自治州の主要放送局である「ラジオ・テレビ・ヴォイヴォディナ」のルシン語放送、ヴォイヴォディナ・ルシン語出版社「ルスケ・スロヴォ」の週刊紙ルスケ・スロヴォ、そして若

者向け文化誌 MAK の取材陣が駆けつけるなど、この学会がヴォイヴォディナ自治州のルシン人共同体において注目を集めるイベントの一つであることがうかがえた。

報告の半分以上を占めたのは、ルシン語および言語文化をテーマにした報告であった。ノヴィ・サド大学哲学部ルシン学科助手で大学院博士課程に在籍中のアレクサンデル・ムドリ氏の報告「インターネットにおけるルシン語の『見えない意味』」(„Невидліви значення“ руского языка на интернету) は、SNS サイトにおける若い世代のルシン人の言語を題材に、省略や略語といった、いわゆる「見えない意味」がどのように実現されるかを、語用論的に分析したものであった。同じく若者言葉を扱ったルシン学科学生のマリーナ・ビルカシュ氏の報告「SMS における若いルシン人の言語」(Язык младих Руснацох у смс-ох) では、携帯電話の SMS における言語の特徴の分析結果が示された。SMS は e-mail をはじめとするインターネット上のコミュニケーションよりも文字数制限が厳しいため、略語や省略といった現象が多くみられる。また規範としてはキリル文字を使うルシン語ではあるが、インターネットの場合と同様、SMS を使ったコミュニケーションにおいても技術的問題などを理由にラテン文字で書く若者が大多数を占めることが示された。ムドリ氏とビルカシュ氏の報告が若いルシン人の言葉を扱っているのは、偶然ではない。話し手の数が年々減少し、言語の維持に危機感を抱くルシン人の数は多いが、その一方で国家公用語であるセルビア語の影響は大きく、ルシン語で教育の受けられる学校を選択しないルシン人の数も増えてきている。若い世代がどのように自分たちの言葉を用いているのかという問題は、ルシン人共同体にとって非常に重要なテーマであり、言語の保持や活性化、さらには外来語の受容といった問題とも関わりながら、今後更なる広がりを見せるテーマの一つであることが感じられた。

ノヴィ・サド大学哲学部大学院博士課程でルシン語学を専門にしているモニカ・アボヂ氏の報告「ルシン語の摩擦音の起源」(Походжене фрикативних консонантох у руским языку) は、ルシン語の摩擦音がスラヴ祖語の子音の組み合わせをどのように反映しているかを体系的に示すものであった。また、ルシン学科卒業生で、現在は週刊紙ルスケ・スロヴォの記者であるアーシャ・パプガ氏は、報告「ルシン語における母音体系の発達」(Розвой вокалскей системи у руским языку) において、ヴォイヴォディナ・ルシン語の母音がスラヴ祖語の母音体系をどのように反映しているかについて論じた。アボヂ・パプガ両氏の報告は、これまでスラヴ語比較文法で取り上げられることの少なかったルシン語を扱ったという点で共通しており、ルシン語の通時的研究に対する関心の大きさを示すものであった。

プレシヨフ大学哲学部で英語とルシン語を専攻しているカタリーナ・ペトルソヴァー氏による「ヴォイヴォディナとカルパチアのルシン人の関係」(Vztahy medzi vojvodinskymi a podkarpatskymi rusinmi) と題された報告は、カルパチア山脈の麓のル

シン知識人とパンノニア平原へと移住したルシン人グループの知識人の学術的・文化的交流に焦点を当てたものであった。ヴォイヴォディナ自治州（およびクロアチアのスラヴォニア）のルシン人コミュニティは、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ハンガリーに住む国外のルシン人コミュニティと政治・文化的につながってはいるが、お互いに多くのことを知っているわけではない。カルパチアのルシン人たちが与えた影響について知ることは、会場に訪れたヴォイヴォディナ・ルシン人にとっても非常に興味深いテーマであり、報告後の質疑応答も活発であった。

筆者の報告「ルシン語の温度を表す形容詞の意味と語結合」(Семантика и колокация прикметнікох зоз значеньом температури у руским язикy) は、ルシン語の温度を表す形容詞の意味と共起可能な名詞のクラスの分布を取り上げたものであった。温度を表す語彙表現の研究は、言語学において比較的新しいテーマの一つであり、世界の諸言語における温度表現を扱った論集が2015年に出たばかりである (cf. Koptjevskaja-Tamm 2015)。ルシン語の温度を表す形容詞に関する研究はこれまでなく、またルシン語を題材にした意味論・語彙論的研究も近年ほとんど発表されていなかったため、ルシン語学においても新しいテーマの報告となった。報告後の質疑応答では、ルシン語学において他言語との対照研究や類型論的研究といった分野が未開拓のまま残されていること、そして、従来の記述言語的なアプローチとは異なった、理論言語学の枠組みを用いたアプローチによる研究の可能性があることが確認された。前述のスロヴァキア人の報告者同様、ルシン語を母語としない外国人が参加したことにより、これまでにない新鮮な刺激があったようである。

その他の分野の報告は、文学から地理学まで非常に多岐にわたるテーマを扱ったものであった。ベオグラード大学哲学部で人類学を専攻しているマリーナ・サカチ氏の報告「アイデンティティの基礎としての言語—ルシン人は自分のアイデンティティをどのように見ているか」(Язык як основа идентитету – як Руснак/Рускиня видзи свой идентитет) は、人類学で用いられるインフォーマントへの聞き取り調査を通じて、若い世代のルシン人が自分たちの言語をどのように捉えているか、そしてルシン語が彼らのルシン人としてのアイデンティティとどのように結びついているかを分析したものであった。

ノヴィ・サド大学自然数学部で地理学を専攻しているミハイル・リマル氏の報告「ケレストゥル村域における農場」(Салаши у керестурским хотаре) は、ルシン人の多く居住するルスキ・ケレストゥルの農場の形態に関する調査結果をまとめたものであった。ヴォイヴォディナ平原における農場を意味するサラシュ (салаш) の一般的な概念の説明、そしてルスキ・ケレストゥル村周辺のサラシュをめぐる状況の現地調査の結果は、専門外の聴衆にも非常に興味深いものであった。

ノヴィ・サド大学哲学部ルシン学科で非常勤講師を務め、大学院博士課程にも

在籍中のアナ・リマル氏の報告「オリガ・コビリャンシカとミハイロ・コツェビンスィキのミハイロ・コヴァチへの影響」(Уплів Олги Кобилянської и Михайла Коцюбинського на Михайла Ковача) は、ルシン語作家の中でもとりわけ有名なミハイロ・コヴァチの著作における2人のウクライナ語作家の影響を扱ったものであった。報告によれば、コビリャンシカの作品の影響は、コヴァチの作品によく見られる家族内における相続問題とそれをめぐるトラブルのモチーフとして現れ、一方コツェビンスィキの作品は、作家が民衆にとって利益をもたらすものでなくてはならないという教育的・啓蒙的な思想において影響を与えたという。ルシン文学とウクライナ文学のつながりは、ルシン文学研究において重要なテーマの一つであり、聴衆の関心も大きかった。

ノヴィ・サド大学哲学部大学院博士課程で歴史学を専攻し、ヴォイヴォディナ自治州西部にあるソンボル市の歴史文書館所属のサーシャ・サバドシュ氏の報告「ウジホロドの年次刊行物『カルパチア学術協会の大農業経済暦』におけるバチュカのルシン人のための付録(1941年～1943年)」(Додаток за бачванских Руснацох у рочней публикації «Великий сельско-господарский Календар Подкарпатского общества наук» з Ужгороду (1941-1943)) は、ウジホロドで発行されたルシン語の刊行物におけるバチュカ・ルシン人向けの付録を分析したものであった。41年のユーゴスラヴィア侵攻以降、ハンガリー王国の占領下におかれたバチュカのルシン人の文化活動およびウジホロドのカルパチア学術協会との知的交流を扱った報告は、学会の最後を飾るに相応しい、非常に興味深いものであった。

*

今回のルシン学会は3回目の開催ということもあり、プログラムの大きな変更・遅延もなく学会は成功裏に終わった。また、初めて外国人報告者の参加があったこともあり、ルシン学科の教授陣からだけでなく、ルシン語メディアからの注目も大きかった。筆者がルシン語で報告するのはこれで二度目になるが、聴衆全体がルシン語を母語とするケースは初めての経験だったので、緊張も大きかったが、その分報告後の質疑応答などで得たものも多かった。ルシン語は、スラヴ系のマイクロ言語の中でも数少ない、学術分野でも機能している言語のひとつであるが、ルシン語・ルシン文学研究の分野を除けば、その使用は大きく制限されている。そのような状況の中で、若手研究者や専門家がルシン語で報告をし、ルシン語で論集を発行するという試みは、非常に意味のある活動である。今後ルシン人共同体がどのようにこの学会を発展させていくか、そしてルシン語が学術分野でどのように使用されていくか、動向をしっかりと見守りたいと思う。

参考文献

- Зборнік 2013 – Тамаш, Юлиан и др. (ред.) (2013). *Зборнік роботох зоз Першей студентскей науковей конференції „Улога младих у розвою рускей заєдніци у Войводини”*. Нови Сад: Мак/НВУ „Руске слово“, Одделене за русинистику, Вигледовацки круг.
[<http://www.ruskeslovo.com/wp-content/uploads/2015/04/НАУКОВИ-ЗБОРНІК.pdf>]
- Зборнік 2015 – Варга, Борис и др. (ред.) (2015). *Зборнік роботох з Другей рускей науковей конференції младих науковцох и професионалцох отриманей 24. мая 2014. року у Новим Садзе*. Нови Сад: Завод за культуру войволянских Руснацох, Одделене за русинистику, Вигледовацки круг.
[<http://zavod.rs/zborniyk-robotoh-z-drugej-ruskej-naukovej-konferentsiyi-mladih-naukovtsoh-i-profesionaltsoh-otrimanej-24-maya-2014-roku-u-novim-sadze/>]
- Сабадош, Саша. (2013). Капиталне видане як резултат пионерского крочаю. У: *Шветлосц 3/2013*. Нови Сад: Руске слово: 330–333.
- Кортјевскаја-Тамм, Мария. (ed.) (2015). *The Linguistics of Temperature*. Amsterdam – Philadelphia: John Benjamins.



[写真 2.] 第3回ルシン学会の集合写真 (写真提供：アーシャ・パプガ氏)